Nagoya University Center for Developmental Clinical Psychology and Psychiatry
http://cdcpp.nagoya-u.ac.jp/

名古屋大学発達心理精神科学
教育研究センターニュース

No. 5 2013年度

編集／発行
名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町　TEL:052-789-2658

KOKORO

特集

発達障害児のライフサイクル支援セミナー

発達心理精神科学教育研究センターは、8月23日（金）、豊田講堂他において、発達障害児のライフサイクル支援セミナー「発達障害児に対する将来を見すえた支援～幼児期から成人期に向けて～」を開催しました。これは、平成19年度より文部科学省特別研究経費を受けて施行している、「発達障害分野における治療教育的支援事業」の地域への成果発信の場として行われたもので、学外の専門家を中心に約700名が参加しました。

午前は豊田講堂で行われ、國枝秀世副総長の挨拶の後、樋口一宗文部科学省特別支援教育調査官による特別講演「特別支援教育の現状と課題」が行われ、障害者や特別支援教育に関する最近の我が国における施策や現状について紹介がありました。次いで、「発達障害児へのライフステージに応じた支援　～将来を見すえて～」と題したシンポジウムを行い、野邑健二同センター特任准教授をはじめとする5名の臨床心理士・児童精神科医師による発表がなされました。その中で、幼児期から高校・大学生、成人に至る様々な年代での発達障害児に対する支援のあり方について、それぞれの実践・研究に基づいた報告がなされたのち、活発なディスカッションが行われました。

午後は、全学教育棟で、幼児期、学童期、特別支援教育、学習障害児、家族支援を主たるテーマとする5つの分科会（それぞれ参加者約100名）に分かれて、発達障害児に対する支援に関して、より専門的な研修がなされました。

シンポジウム

発達障害児へのライフステージに応じた支援～将来を見すえて～

1. **野邑 健二**（名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター特任准教授）
「発達障害児への早期からの支援　～健やかな学校生活のために～」

2. **岩坂 英巳**（奈良教育大学特別支援教育研究センター長・教授）
「二次障害に対する支援　～児童精神科医の立場から～」

3. **井上 朋子**（愛知県中学校 SC・一般社団法人サポートネットゆっか代表理事）
「中学校現場で起こっていることとその対応」

4. **木谷 秀勝**（山口大学教育学部附属教育実践総合センター教授）
「発達障害を持つ高校生・大学生への支援」

5. **髙橋　脩**（豊田市こども発達センター・センター長）
「成人期を見すえた支援」

分科会

❶ **幼児期における発達障害児への就学に向けた支援**
岡田 香織（名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター研究員）

❷ **特別支援教育における学校と専門家との協働**
福元 理英（名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター特任助教）

❸ **学校における学習障害児のつまずきの理解と支援**
畠垣 智恵（静岡大学人文社会科学部講師）

❹ **発達障害の子どもが学校生活を楽しく送るための工夫**
小倉 正義（鳴門教育大学大学院学校教育研究科講師）

❺ **発達障害児を持つ家族への支援**
野邑 健二（名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター特任准教授）

特集　発達障害児のライフサイクル支援セミナー

ディスカッション

本人への第2の告知

岩坂●木谷先生に質問させていただきます。進路の上で第二の告知というのは、すごく大切かなと思っています。高校を決めていくあたりで、あるいは先生が取り組まれている大学での自己理解とで、先生が本人にどういうふうに説明されて、本人にどういうふうに自己理解をさせているか、具体的に教えていただけますでしょうか。

木谷●第二の告知は高校進学ですので、より具体的に言うと、高校進学のスタートは、実は中2の2学期の期末テストと3学期の学年末テストの中身からスタートします。やはり中2の後半の論理性を要する学習レベルがどのぐらい突破できているか、できないかということが、高校の適応を決めます。したがって、そのあたりのテスト問題と答えを実際に持ってきてもらって、すべて分析をします。それを、子どもと家族と、時には先生と一緒に眺めながら、学校の適応も考えて、目標がどのぐらいクリアできているかということについて、少しずつ負荷をかけていくと、それで随分、子どもたちが自分の得意さ、苦手さを理解していきます。

それと大学での自己理解については、正直いっていろんな段階がありますけれども、基本的にはきちんと告知を受けている子どもたちを中心に行っておりますが、真正面からきちんと、自分の障害の特性で特に得意なことと苦手なことが何であるのか、本人たちに理解させることが重要です。

大学生を対象に合宿を行っていますが、参加者全員に対して、パソコンで自分でつくったスライドをプレゼンテーションさせます。大学生ぐらいになりますと、そういった自分自身のことを言葉にするという機会をつくるということが、自己理解を促進させる機会と思って、我々は取り組んでおります。

家族とのコミュニケーション

木谷●現場の先生たちと話していてわかるのは何かというと、今、特別支援で、一番苦慮されているのは、ご家族の対応です。ご家族がなかなか相談にのらない場合にどう対応されているのかなあというのを、特にスクールカウンセラーの立場と、高橋先生にもお聞きしたいなと思います。

井上●親へのかかわりは本当に難しい。私は中学校にいるのでチャンスは少し狙います。チャンスというのは、ふらっと職員室に入ってきたときに、お子さんと仲良くなっておけば、給食後の休み時間に遊ぼうと引っ張り込むとか。給食をこっちから隣で給食食べるとか、あの手この手のチャンスをつくって、子どもと仲良くなってから、「お母さん、お子さんがこんなに困っていますよ」というような始まり方が、これは別の医療機関では絶対できない技なんですけど、それがちょっとできる。

それから、先生方と本当に観察を細やかにして情報交換していく。それから、ピンチはチャンスといつも思っているんですが、事件が起きてパニックになってわーっとなったときがチャンスだというので、日頃からその包囲網と「こうなったらこうしましょう」という打ち合わせをしておけば、展開がうまれます。

高橋●保護者の方のコミュニケーションについて、お話ししたいと思います。

一つは、特に高機能の子どもたちについては、お母さんが子どもさんと一緒に来てもらって、子どもと私どもがコミュニケーションするのを見てもらって、そして、子どもの考えていることに気づいてもらう。そして、もう一つは、私をモデルにして、子どもとのコミュニケーションの方法を知ってもらうというようなことを、私は心がけています。

だんだんと子どもが喋らなくなっていきますし、なかなか気持ちを聞こうとしても、頑なに拒否したりすることがよくあります。でも、来てくれると、結構考えていることをよく喋ってくれて、親御さんが子どものことを考えていることがわかって安心する。そして、「あ、こんなやさしいところもあったんだなあ。私のことをあまり嫌ってなかったんだなあ」とかいうことに、気づいてもらえることがあります。そうすると、帰っていく姿が、なんとなく寄り添って帰っていくというようなことになったりもします。

もう一つ、申し上げたいのは、親御さんで、医者である私や学校の先生とうまくいかない親御さんがみえます。そこでアドバイスしておきたいのは、心がけているのは、「難しい人は手放してはいけない」ということです。難しい人というのは、それは自分の支援者としての限界を意味しているわけですよね。同じような人にまた出会ったときには、もう私はその人のことがフラッシュバックして、もう先に進めなくなります。それは、私の支援者としての能力の限界を示しているわけです。 うまくいく人というのは、過去のやり方で通用するということですよね。ですから、難しい人、うまくいかない人こそ、自分を成長させてくれる人だといって苦しみながらやっていくと、ひょいとうまくいく。そしてまた一歩成長できる。そういう関係かなと。

木谷●支援者と家族とのコミュニケーションということはすごく大事で、気づきがあっても、病院まで、相談機関までつながらないというときに、どうかかわるかということで、いつもお話したときに出てくることは、まず大事なことは、たとえば学校の先生が、「この子、気になるな。どうやったら相談機関につなげられるかな」といったときに、家族さんに話したときに、「こんなことで困っている」というマイナスの話じゃなくて、できることですね。「こういうことはできる」というプラスを必ず親御さんに伝えていただくこと。併せて、「学校でこうだから、専門機関」と言っても納得されないので、おうちのことも聞いていくということですね。「おうちではどうですか」ということを聞いていく。そのうえで、たとえば「学校でこういうふうにしているとうまくいくけど、もう少し詳しく知りたい」「この子のことをもっと知りたいので、専門機関に行ってほしい。そのあと一緒に考えていこう」という、そういった伝え方が大事かなと思います。

将来を見すえた支援

司会●最後に、先生方に、今日のテーマである、将来を見すえた視点ということを言ったときに、どんなことが一番大事になってくるのかということについてお話を伺って、このシンポジウムを締めくくりたいと思います。

岩坂●では、今、家族の方というお話がありましたので、本人だけじゃなくて家族も一緒に支援をしていくことが、ライフサイクルを考えるうえで大事だと思います。 そのときに、家族が本人のことを、より理解できるようにしていくことですね。そこで、1点だけ、大切かなと思っていることは、「家族に教える」とか、「家族に指導する」というのは、専門家のおごりだと思いますので、基本的には家族の方をリスペクト、尊重するような形で話をするようにすることがスタートになると思います。

井上●中学校、あるいは20代、30代のひきこもりの青年たちと、今関わっている者として、一番深刻で大きい二次障害は、ひきこもりです。ひきこもった人たちが中学を振り返って、「僕の話を聞いてくれる先生が欲しかった」ということがあります。聞いてもらえる人がいるとやっと話す自分がいるというふうで、何か「コミュニケーションをしていいんだ」というふうな感じに、中学の間に、なっていただきたいなあと思っています。

それと、彼ら小中学校は選べないんですが、高校は初めて選ぶことができますので、その本人の特性に無理がない進路に導いていただくなり、考えやすく保護者の方に情報を流していただくなりをしていただけたら、人生が全然変わってきたのではないかなあという方にたくさん出会っております。

木谷●高校生、それから大学生たちと出会って、ほんと彼らは精一杯頑張っています。特に高校に入って、さらに進学を目指すと大変なんですが。でも、そんななかで彼らに我々が一番、何を大事にしているかというと、とにかく寄り道です。学校からまっすぐに帰っても、気持ちはコントロールできません。むしろ途中で、どういうふうに寄り道をしながら、自分をコントロールできるか。そして、寄り道をしながら、ちょっとアスペルガーはアスペルガー、ADHD は ADHD らしい自分に戻る。そういう時間をちょっと工夫するだけで、彼らは、安定感をもっていきます。

最近、特に高校生なんかでは多少時間がかかっても、遠くの高校のほうが寄り道がいろいろできるよということで薦めております。大学の先生には申し訳ないですけど、大学は人生の寄り道みたいなところですので、外でじっくりと、やっぱりもう一回、自分自身を見つめるという、そういう大事な寄り道の時間、これが青年期だと思います。

高橋●仕事というのは2つしかないですよね。ものを相手にした仕事と、人を相手にした仕事。自閉症の人は、ものを相手にした仕事が向いてて、人を相手にした仕事が向かないというふうに、私たちは思い込んでいます。その思い込んだ根拠は、過去の経験にもとづいてですけれども。

でもね、そうでない子も結構、出てきました。営業マンになりたいといって営業マンになる人。大工さんになりたいといって大工さんになった人。休日は友達と4泊5日で東京へ出かけていく人。いろんな多様な人生を実際、よく見ると生きていることがわかります。

私たちは過去の経験に基づいて、「自閉症とはこういうものだ」「ADHD はこういうものだ」と思い込んで、それを子どもたちに当てはめて支援をしています。でも、それぞれのみんな子どもたちは違うんですね。ですから、子どもたち主体、子どもたちを中心にして、私たちからしても危なっかしいというふうな選択をする子もいます。でも、それもちゃんと認めて、もし失敗しても、「それがなぜ失敗したのかなあ」「また同じ失敗しないように、次どうしたらいいのかなあ」。すなわち失敗も糧となってたくましく生きていけるような支援をしていく。それが、私たちの最終的な役割なのかなあ。

子どもたちは、本当に、私たちの考えている世界を突き破ってどんどん自由に羽ばたいていきます。これから、自閉症らしくない自閉症、ADHD らしくない ADHD の人がどんどん増えていくんじゃないかなあ。そういう世界を支援するのが、私たちの役割じゃないかなあと思っています。

司会（野邑）●どうもありがとうございました。今日、シンポジウムの中で、「成人期を見すえた支援」ということで、各いろいろな年代の支援についてお話しいただきました。

岩坂先生が講演の中で「今日のキーワードは達成感になるんじゃないか」と言われていましたけれども、ほかの先生の講演でもやはり同じような言葉が出てきました。子どもに、その年代年代で達成感を持って、自信をもってやっていただくかということが共通して重要と考えてよいのかなと思います。

僕が幼児期や小学校の子ども、親御さんとかかわっていて大事なのではないかと思うのが、褒められて喜ぶ子かどうかということです。先生によく聞くのが「この子、おだてに乗りますか」とか、「褒められて喜んで調子にのっていろいろやってくれますか。頑張ってくれますか」ということなのですが、それで「あ、この子、そうそう」という子は、その後の関わりがやりやすいと思います。 褒めても喜ばないし、おだててもあんまり反応がない子って、ちょっと難しいところがあるなあと思います。そのへんが達成感とか自信を持っている子か、そういう経験をしているか、あるいは、周りの方から自分が認められているというのを自覚できているかどうか、その指標なのかなあと思います。

そしてそれは、親御さんに関してもそうだと思っています。お母さんお父さんに関しても、子育ての中で自信を失っていますので、お母さんに対しても褒められて喜ぶかどうかとか、こちらがそれいいですねと言ったときに、ちゃんと自信を持ってもらえるかどうか。何かそのへんも、僕は気をつけてやっていきたいなと思っています。

発達心理精神科学教育研究センター　主催　公開講演

フィンランドの子どもに対する福祉の理念と目標

トゥルク大学　教育学部
教授　Soili Keskinen

トゥルク大学教育学部教授の Soili Keskinen 先生は本センターの客員教授として2013年3月から2か月間滞在されました。専門は発達心理学であり、本センターの松本真理子教授と2003年以来、子どもの学校環境とメンタルヘルスに関する2国間比較研究を継続しています。

ここでは滞在中にセンターで実施した公開講義のうち、最終回の概要を以下に紹介します。

フィンランドという国

まず、フィンランドの写真を2枚おみせします。冬はとても寒いです。私の住むトゥルク市ではマイナス10度になります。これはラップランドの写真です、マイナス24度になります。なので、私たちは温かい服装をします。また夏の時期は、湖畔のサマーコテージで過ごします。フィンランドには20万の湖があり、このような景色は夏の間フィンランドのそこら中で見ることができます。

教育文化省における 9 つの政策目標

フィンランドでは現在、子どもや青少年、人々の福祉をより良いものにするためにいろいろなプログラムが検討されています。ここでは9つの政策目標についてお話しします。

その1～責任感を持った意欲的な国民としての成長

まず、第1には子どもと青少年は将来、意欲的で、責任感のある国民として成長してほしい、という考えです。意欲的で責任感がある国民に成長するためのスキルとはいったいどんなものでしょうか？主に3つのスキルがあります。

1つ目は変化する世界で役立つスキルです。若者が変化する世界で生活をしていけるようにするのは福祉です。フィンランドでおこっている変化についていくつか例をあげます。

たとえば、バスのチケットを携帯電話で購入できます。5年前はできませんでした。インターネットで支払いができます。世界や私たちを取り巻くさまざまな環境が変化しています。だから若者は変わりゆく世界に対応できるスキルが必要です。

次に大事なスキルは他人と協力することです。生活はどんどん複雑になり、自分だけでは解決できません。だから他の人と協力したり、他の人を助ける必要があります。

第3は必要なものと不必要なものを見極める能力です。テレビやメディアなど情報を得る媒体は膨大です。だからこのような知識が必要です。

ここで、国民に必要とされる6つの基本スキルを紹介します。

① 思考のスキル

生徒は学校で、問題解決、理由付け、批評、クリエイティブな思考など、日々学びます。

批評的な思考や一般的な思考をのばすにはマインドマップの手法をつかいます。日本のテレビでもやっていました。マインドマップはグループ活動でも個人でも使います。

② 工芸と運動のスキル

2016年に始まる新しいカリキュラムで、図工の授業と体育の授業が増えます。子どもたちが自分の手で何かを作ることができるということは子どもの福祉と考えます。

③ 働き方と相互作用のスキル

どのようにして、知識を使うかどのように他人とコミュニケーションをするか、他人とどのように協力するか。最近は回転が速いので、私たちのテンポに影響してしまい、物事を素早くすましてしまいますが、物事を長期間、ゆっくり、慎重に考えるスキルが重要になってくると考えます。

④ ICT のスキル

フィンランドでは6歳児の半数が携帯電話をもっています。7歳では80パーセントが自分の携帯をもっています。80パーセント以上の家庭が少なくとも1台のコンピューターを使用しています。そういうことからしても ICT のスキルはとても重要です。教師は子どもたちに使いかたを教える義務があります。

⑤ 社会とコミュニティを理解するスキル

若者が違う民族、違う背景、違うカルチャーなどを知ることが大事です。例えばトゥルクでは25パーセントが移民である学校があります。生徒は違う国からやってきた人たちともコミュニケーションをとるスキルが必要です。

⑥ 自己認識、自覚、自己反省のスキル

例として、Kiva プログラムについてお話します。Kiva プログラムの大事な点は2つあります。まず1つはいじめを未然に防ぐことです。未然に防ぐというのは、教師がクラスで生徒たちにいじめに対する戒律やルールを指導するということです。第2点は先生がいじめに気付いたら、それに対処することは先生の義務であるということです。

その2～文化活動、スポーツ活動などに平等に参加する機会

家族の状況、経済状況、住む地域、障害のあるなし、などの状況にかかわらず、平等な機会があるということはフィンランドではとても重要な考え方です。

学校では3つのレベルのヘルスサービスがあります。まず、学級でのすべての子どもに対する一般的な支援、2001年から、法律で、担任は学習障害児の有無を鑑別することが義務になっています。

該当する生徒がみつかると学校のヘルスシステムに所属する看護師、スクールサイコロジスト、医師でその生徒の支援について検討します。

第2レベルは小グループによるパートタイムの重点的サポートです。小学校のどの学年も23パーセントくらいの生徒がこのサポートをうけています。第3のレベルは特別支援学校もしくはフルタイムの特別支援学級における特別支援。このサポートは小学校の全学年の8.5パーセントの生徒がうけています。

その3～若者に対する雇用の保障

これは今年（2013）の1月から施行された新しい法律で、とても重要なものです。フィンランドでは失業率が大変高く、フィンランドでは15−24歳の若者の失業率は19パーセント、日本は9.1パーセントです。失業対策プログラムとして、若者は学校を卒業したら、職もしくは失業から3か月以内に学習の場もしくはリハビリテーションの場を与えられなくてはならないという法律です。

その4～差別の廃止

フィンランドでは移民の子ども、とくにロシア、エストニア、中国、アフリカからの移民が多いですが、彼らは、教育の一部を母国語でうけることができます。これは政府にとって、大変な負担です。また、移民の子供たちへの支援として、フィンランド語の補習をしています。私たちは、移民の子どもたちが、フィンランド語が上達することによって、フィンランドで仕事が見つけやすくなるということがわかっています。

その5～性差の平等

フィンランドでは性差の平等はとても大事だとされています。男女は仕事に同じように行けますが、男性は女性よりも給料がよいです。この状況を改善すべく努力しています。

その6～若者の独立

フィンランドは個人主義的な文化に属しますので、このことは大変、重要視されます。フィンランドでは、高校卒業後、若者が家から離れるのが一般的です。政府は、生活の経済援助、医療、食事のサポートをします。

その7～すべての子どもや青少年は質の高い教育を受ける

公立学校は無料、教科書、ランチは無料、大学はほぼ無料です。フィンランド人にとって、すべての人が学び、よい教育をうけられることはとても大事なことなのです。

その8～子どもと若者の Well-being と福祉を保証するための予防策

母と子どものクリニックは無料です。また学校では、学校の保健システムがあります。政府ではより充実したプログラムを実施するには看護師は600人の生徒に対して1人、医師は2100人に対して1人、心理士は850人に1人必要であるとしています。

その9～子どもと若者に対する福祉の多職種連携

青少年、家族に関する問題を解決する専門家は訓練、教育をうけた専門家です。通常、ソーシャルワーカー、心理士、看護師です。通常こちらの3業種の専門家で協力して業務を行いますが、フィンランド人はプライバシーを重んじるため、例えば、先生は勝手に生徒のカバンや机を本人の許可なくして開けてはいけません。そのため、専門家のグループはご両親が考えていることをさぐり、子どもが今どのような治療や活動が必要かを理解してもらうように努力しなくてはならないので大変です。

以上が　フィンランドの子どもと若者に対する新たな政策目標であり、実現に向けて努力しています。

客員教授として名古屋大学で成功した7つの理由

私の名古屋大学滞在は2013年3月のはじめから4月の末までででした。

私は客員教授として滞在が実りあるものになるためには少なくとも次の7つの要因があると考えます。そして、それらが名古屋大学において、素晴らしく充実していたことにとても感謝します。

1. 今回の滞在目的として現在継続中の共同研究がベースにあったこと。：効果的な滞在にするためには、訪日前に共同研究のベースがかたまっているということです。私は松本真理子先生と10年以上にわたって共同研究しています。滞在中に共同編集の出版化を進め9月に刊行されました。
2. 滞在前の良いタイミングで滞在中の仕事の明白で現実的な計画がなされていること。：松本教授は訪日の半年前に滞在中の計画を送ってくれました。私たちはまた新しい共同研究プロジェクトも始めることにしました。
3. 受け入れ部局の事務員が客員教授のサポートをしてくれること。：私は日本語を読むことも、話すこともできません。しかしついてくれた秘書がまさに理想的な秘書であったので本当にラッキーでした。
4. 組織のなかで存在をあきらかにするために学部で自己紹介をする場をもうけてくれること。：私のカレンダーには心理学の会議、学部の会議、教授の会議などの約束がかかれています。そして、もっと重要なのは、歓迎会とさよならパーティーでした。

5. 仕事場と住環境があらかじめ用意されていること。：私の住居は野依インターナショナルハウスで、自分の名前がドアのところに貼られていて、コンピュータのサポートをしてくれるスタッフもいました。宿舎は仕事にも街や他の場所へ訪問するにも理想的な環境でした。
6. 客員教授がいかに滞在中に楽しめるかということ。：松本教授は名古屋での私の計画をすべて責任もってしてくださいました。彼女は山のほうに2回の旅行も企画してくれました。そのときのコンタクトが思い出になり今後の協力のモチベーションになります。
7. お給料は仕事のモチベーションとしてはとても重要であること。：給料を支払われるということは、客員教授に対して、プロフェッショナルなスキルを提供することを求められているという明白な証です。

発達心理精神科学教育研究センター　主催　公開講演

学習障害および、ワーキングメモリー障害の子供たち ―ジャカルタの小学校の現状目標

インドネシア大学医学部精神科
講師 Tjhin Wiguna

発達心理精神科学教育研究センターの主催で、7月22日(月)、インドネシア大学のウィグナ先生をお招きし、公開セミナー「学習障害および、ワーキングメモリー障害の子供たち―ジャカルタの小学校の現状」を開催しました。本学学生や学外の心理・教育関係者など約30名の参加がありました。

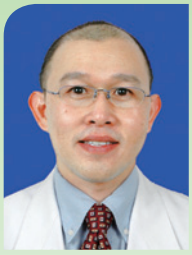
学習障害（Learning Difficulties；LD）を持っている子どもは、知的な能力と学業成績との間に大きな乖離があります。学習障害は、アメリカでの頻度はおおよそ6-10%とされていますが、インドネシアでの頻度に関しては、未だ不明です。

一方、ワーキングメモリーとは、推論・理解・学習といった複雑な課題を遂行するのに必要な情報を保持する能力です。ワーキングメモリーは、学校や家庭で生活するには、欠かすことができない能力です。ワーキングメモリーに問題があると、気がちりやすく、集中力が低下することで、学業にも支障が出やすくなります。先行研究では、ワーキングメモリーが学習能力を予測すること、ワーキングメモリーの査定は、学習能力の測定にも有益であることが示されています。

そこで、学習障害とワーキングメモリーの障害を同時に持つ小学生の頻度を調べることと、ワーキングメモリーの欠如が学習障害に与える影響の大きさを検討することにしました。

今回の研究では、学習障害を他のクラスメートの成績の平均より、成績の平均が低いことと定めました。ワーキングメモリーの欠如は、Alloway らによって開発された Working Memory Rating Scale（WMRS）を用いて測定しました。これは20項目の質問から構成されており、2011年にインドネシア版が作成されています。また、精神障害の影響を排除するために、構造科面接の一つである Mini Neuropsychiatric Interview for Children（MINI-Kid）を実施して、子どもたちの精神障害の有無について確認しました。十分なサンプルサイズを確保するために、ジャカルタにある小学校からランダムに30の小学校を選択しました。その中から、最終的には27校が協力しました。対象は、27校の中からランダムに選ばれた、5歳から15歳の423人の小学生でした。全体のうち、58人（13.7%）に学習障害が認められました。その中の34人に、ワーキングメモリーの欠如が認められました。ワーキングメモリーの問題をもつ子どもは、学習障害を持つ確率がそうでない子どもに比べて、7倍のリスクがあることが示されました。

今回の研究の限界として、学習障害とワーキングメモリーに与える他のリスク要因、例えば、栄養状態や家庭環境などについて考慮されていない点があげられます。さらに、今回用いた学習障害の定義は、広く用いられている定義とは異なっています。知能指数についても測定されていませんでした。これらの限界があるものの、ワーキングメモリーの欠如が子どもの学習能力に影響する重要な要因であることを明らかにしました。



Message ウィグナ先生からのメッセージ

私の思い出はたくさんありますが、特に感激したのは、あなたがたの温かいホスピタリティーの精神です。あなたがたのサポートや励ましは私にとってとても助けになりました。とてつもなく大きな総合大学である名古屋大学は、私にとって驚きであり、もっともっと学びたいという刺激になりました。とくに中央図書館です。私の息子にぜひ日本で、いや、ぜひ名古屋大学で学ばせたいと思うようになりました。

私は、本当に講義を楽しんで行うことができました。とても有意義で、参加者との距離感が縮まりました。参加者からも、ありがたいことにたくさんの質問を頂きました。私はそのことが忘れられませんので、再度名古屋大学に戻って、みなさんと共に過ごしたいと考えてしまいます。名古屋大学の益々の発展を祈っています。

講演報告

公開レクチャー

平成25年7月22日（月）18:30～20:00
名古屋大学Ｆ演習室

Dr. Tjhin Wiguna（インドネシア大学医学部精神科講師）

「学習障害およびワーキングメモリー障害の子ども達―ジャカルタの小学校の現状」

平成25年8月23日（金）　名古屋大学　豊田講堂ホール他

発達障害児のライフサイクル支援セミナー
「発達障害児に対する将来を見すえた支援
～幼児期から成人期に向けて～」

主　催：発達心理精神科学教育研究センター
後　援：文部科学省、愛知県教育委員会、岐阜県教育委員会、三重県教育委員会、名古屋市教育委員会、蟹江町、蟹江町教育委員会、知多市、知多市教育委員会

発達心理精神科学教育研究センター　主催　公開講演

発達障害における不器用さ～児童の身体運動、認知、社会領域またがる諸問題の発達支援

オタゴ大学
准教授　宮原資英

発達心理精神科学教育研究センターでは、毎年、外国人研究者をお呼びして公開講演を開催しています。今年は、オタゴ大学(ニュージーランド）の Motohide Miyahara 准教授をお招きし、「不器用さ」をめぐる諸問題について公開講演を開催しました。Miyahara 先生は、20年前、名古屋大学教育学部から誕生したアスペ・エルデの会の研究プロジェクトに立ち上げ当時より参加されており、不器用さをとらえる検査である Movement－ABC の日本版の開発や、「子どもの不器用さ」などの著作も名古屋大学の教員とともに執筆をされてきている縁の深い先生です。近年ではコクラン共同計画にも携わられており、発達性運動協調障害（DCD）児を対象とした介入研究のシステマティックレビューとメタ分析を実施されるなど、心理学研究法に熟知され、研究の分野を広げられてきています。今回は、運動面、認知面から社会面における能力が年相応でないときに一般的に用いられている「不器用さ」ということばを切り口に、意外に見過ごされてきた発達障害と不器用さとの共通点、そして不器用さを改善するための発達支援の効果を、エビデンスとナラティブの両面からお話しいただきました。参加者からは、“私たちが普段何気なく用いている「不器用さ」という言葉が，多様な意味を持っていることに気がつかされた”“ディスカッション中心の講演会が興味深く，メモをとるのを忘れるくらいでした”と、評価も高く、今後の研究交流の可能性につながる貴重な講演の機会となりました。

公開講演に参加して

教育発達科学研究科修士１年　田中あかり

今まで発達障害についてはよく取り上げられ勉強する機会が多くありましたが、DCD についてはあまりそのような機会がなかったため、とても貴重な経験となりました。DCD は発達障害と併存することが多いとのことですが、発達障害をもつ子どもたちの支援は、やはり行動の問題に目をむけられることが多く、不器用といった点ではあまり注目されてこなかったように思います。体育指導、教科学習など、全体でのまとまり、統一感ということが要求される面がある教育、風土は DCD の子どもにとってとても苦痛であると思います。健常との境目が曖昧であるために、それが誤解や偏見、そして劣等感、自己肯定感の低下に繋がると思うと、多角的にその子どもを見立てしっかりフォローしていく必要があると痛感しました。先生の型に当てはまらない講義に圧巻された時間でした。

宮原先生の講演に参加して

名古屋大学教育学部４年　中島卓裕

宮原先生のお話を聞いて、普段何気なく使っていた「不器用」という言葉の意味を考え直しました。自分は発達障害を専門として学んでいるのですが、そこでよく聞く「不器用」は手先や身体運動の不器用さのことを指しているように感じます。自分自身が使うときもそのような意味を意識して使っていました。しかし宮原先生は講演の中で不器用さは身体運動だけでなく認知、社会領域にまで広がる概念であると述べていました。広すぎるとも思える概念ですが、お話を聞いているうちに、そのような広い意味での不器用を考えてクライエントと向き合っていく必要性を感じるようになりました。これからは自分も広い不器用の概念をもって学問を深めていきたいです。聞いている側も巻き込んで広げられていく宮原先生の講演は、まるで少人数ゼミ形式の授業を受けているような感覚で、先生との距離がとても近く感じられました。貴重なお話を聞くことができて本当に勉強になりました。

来年度予定

平成25年12月21日（土）17:00～19:00
名古屋大学教育学部大講義室
宮原資英　オタゴ大学（ニュージーランド）准教授
「発達障害における不器用さ
～児童の身体運動、認知、社会領域に
またがる諸問題の発達支援～」

2014年度客員准教授
Dandii Odgerel
Mongolian State University of Education, Teacher's School
（モンゴル国）
分野：教育学
研究テーマ：モンゴルにおける発達障害児に対する
特別支援教育システムの開発
受 入 期 間：平成26年4月2日～5月16日

スタッフ紹介

■センター長・児童精神医学分野

松本真理子
教授・臨床心理学
●研究テーマ：
・子どものメンタルヘルス支援に関する国際比較と心理教育プログラム開発
・子どもの心理アセスメント

■児童精神医学分野

本城秀次
教授・児童精神医学
●研究テーマ：
・児童青年期の精神的問題
・乳幼児精神医学
・発達精神病理学

■母子関係援助分野

永田雅子
准教授・発達臨床心理学
●研究テーマ：
・周産期の母子臨床
・発達障害の臨床
・乳幼児精神保健

金子一史
准教授･発達臨床学、臨床心理学
●研究テーマ：
・産後うつ病および産後愛着障害への介入
・近赤外線分光法を用いた母親と乳児の相互作用の検討
・児童期のメンタルヘルスに関する日本とフィンランドとの国際比較研究

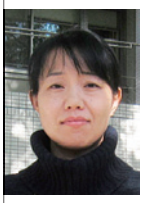
■学校カウンセリング分野

安田道子
教授・臨床心理学
●研究テーマ：
・早期母子関係に問題を有する青年の心理療法
・発達障害児の母親への心理的支援

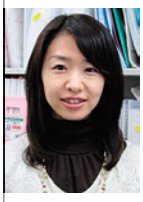
鈴木健一
准教授・臨床心理学、精神分析
●研究テーマ：
・学生相談における対人関係精神分析の援用

■発達障害分野における治療教育的支援事業

野邑健二
特任准教授・児童精神医学
●研究テーマ：
・発達障害の臨床
・乳幼児の発達支援
・発達障害児の家族のメンタルヘルス



福元理英
特任助教・臨床心理学
●研究テーマ：
・発達障害の臨床
・特別支援教育における心理士の専門性についての検討



岡田香織
特任研究員・発達心理学、臨床心理学
●研究テーマ：
・発達障害の臨床
・子どもの発達、メンタルヘルス支援

柴田由己
特任研究員・性格心理学、環境心理学
●研究テーマ：
・衝動性やリスクテイキング行動の個人差について

KOKORO

名古屋大学発達心理精神科学教育研究センターニュース

NO.5・2013年度

●編集後記

今回の特集では昨年8月に開催された「発達障害児のライフサイクル支援セミナー」を取り上げました。定員を超えるおおぜいの方にご参加いただき発達障害児に対する社会的関心の高さがうかがわれました。中でも500名を超える現職教員の参加は、学校現場における指導の難しさを物語るものと思われ、センターとしての今後の課題を考えるきっかけになりました。

さて、センターでは、わが国における子どもの心の支援について、毎年外国人客員教員を招聘し海外との共同研究を行っています。今年度はフィンランドとインドネシアからの客員教員を招聘しました。来年度はモンゴルとの共同研究を計画しています。

小規模構成員のセンターですが、これからも幼児期から青年期までの心の健康支援を研究、実践する名大のソフトな拠点として貢献できるよう努力していきたいと思っています。センターへのご意見、ご希望等いつでもお待ちしております。

松本　真理子